おいでん・さんそんSHOW

4月号
2017.4.30発行

特集｜稲武地球子屋（いなぶてらこや）

山里で、母も子も楽しむ

地球子屋と書いて「てらこや」。この名前には「地域も国も性別も種も、すべてを超えてみんな地球の子どもだという視点で活動できたら」という想いが込められているそう。インスピレーションを受けた本は『あなたが世界を変える日（セヴァンカリススズキ著）』

豊田市在住の作家・阿部夏丸さんを講師に迎えた川遊びの様子

稲武地区で活動する「稲武地球子屋（いなぶてらこや）」は、子どもを持つ母親たちの自主グループです。発足して七年、二年前から新メンバーで運営し、藍染め、ヘボ追い、川遊びなど、山里ならではの魅力的な企画をして、子どもたちと自然体験をしています。活動内容と、お二人のメンバーへのインタビューを紹介します。

自然があるけどゲーム!?

大自然に囲まれた稲武地区に移住してきたのに、子どもの友人は家の中でゲームをしている。子どもたちが自然体験ができる環境を作ろう!そんな1人のお母さんの想いから、稲武地球子屋が発足しました。子どもの成長に応じてメンバー交代し、二年前からは主に稲武地区で子どもたちと自主保育をしていた「野苺の会」の親子が加わり、中心となって運営しています。

現在のメンバーは13家族30人。そのうち、1歳から小学6年生の子どもが17人。住まいは、稲武地区の他、岐阜県上矢作町、旭地区、足助地区と、山村部から幅広く集まっています。

稲武ならではの体験

年度末に発行しているという「稲武地球子屋新聞」に、2015年、2016年度の活動が掲載されていました。

地元、稲武地区の「城ヶ山景を愛する会」の方との『城ヶ山トレッキング』、大野瀬町の一蜂会のおじさんたちとの『ヘボ追い体験&ヘボの子取り体験』、メンバーのお寺での『サマーキャンプと川遊び』、豊田市在住の作家、阿部夏丸さんを講師に迎えた『お話会と川遊び』、稲武在住のアンティマキさんと一緒にやる『草木染め』『藍染め』、『もちつき体験』、あるメンバーの隣家の男性が大根が採れすぎて困っていたことから着想を得た『大根まつり』など、どの企画も、自然いっぱいの稲武地区でしかできないことばかり。そして、地域の方や外部の講師を招き、大人も子どもも自分の世界が広がるような企画ばかりです。

新しい試み

昨年度からは、イベント企画

年に１回発行している
稲武地球子屋新聞

センター長のミライのフツーに向かって！

2017 第1回

ミライのフツーは過去の普通

センター長
鈴木辰吉

「ミライのフツー」は、将来のあるべき姿に向かって少し背伸びしてチャレンジしようという環境モデル都市のコピーだ。センターの取組みにぴったりのネーミングのこのコラムは、連載が始まってちょうど30回目になる。センター民営化を機にさんそんSHOWの紙面を一新したが、このコーナーは残すことになった。これからもお付き合いいただきたい。

「つながる　つくる　暮らし楽しむまち・とよた」を将来都市像とする第8次豊田市総合計画がスタートした。「成長、躍進、活力」の言葉が踊っていたこれまでから一転したミライの都市像は、大いに共感できるものである。

支え合いによる自治、自然との共生、地域包括ケア、地域による子育てなど多くの新政策が、過去においては普通の営みであったことにお気づきだろうか。戦後復興から高度経済成長期を経て今日に至る「拡大と成長」の過程で、忘れられていた普通の人の営みが再び目標として掲げられる時代になったのである。

昔は良かった、昔に戻ろうと言っているのではない。科学技術、医療などのめざましい進歩と、支え合いを基本とする過去の普通の営みが融合した社会を想像してみて欲しい。人口減少社会、「そろそろ降りる社会」は、決してネガティブなものではなく、多様な暮らしの選択肢があり、人類が最も豊かで輝く「安定した成熟社会」であると思う。

ミライのフツーに向かって、新しいセンターの1年が始まる。

イベント情報

平成29年度三河の山里起業実践者の募集

●募集概要

【POINT1】募る人：起業実践者＜起業実践者の条件＞●三河の山里シェアオフィス（愛知県新城市豊岡字滝上３１-１（飯田線湯谷温泉駅すぐ）を拠点に月10日以上活動すること。（個人の場合は本人、企業・団体等の場合はその組織に属する者が常駐すること）●勤務は、週40時間を基本とし、日報・月報を提出すること。●事業の内容について、「三河山間地域と事業との親和性」または「事業が三河山間地域に与える効果」が認められること。●事業者が実施・運営する「三河の山里サポートデスク」の補助業務（移住・定住の推進、集落支援、起業・就業支援、観光振興）を行うこと。【POINT2】事業拠点：三河の山里起業の舞台は、愛知県岡崎市(額田地区)、豊田市(旭、足助、稲武、小原、下山、藤岡の各地区)、新城市、設楽町、東栄町、豊根村。【POINT3】支援期間※：2017年6月から2018年3月までの10か月間。支援は、6月からですが、起業実践者の状況に合わせ柔軟に対応します。※採用から６か月間は、試験雇用の期間とし、勤務成績が良好でない場合は、支援を打ち切ることがあります。【POINT4】支援金：月額30万円（各種手当、通勤交通費等すべて含む）シェアオフィス（新城市湯谷温泉 Hoo!Hoo! 地下1階シェアオフィス）の提供※有料 金2万円（税別）/１か月【POINT5】支援体制：愛知県、地元市町村など

★募集ホームページ（三河の山里　起業実践者　募集）
https://peraichi.com/landing_pages/view/mikawakigyou

●運営事務局「三河の山里サポートデスク」とは：
三河の山里で頑張る起業実践者に対して多様なサポートを行うのが、本事業の運営事務局「三河の山里サポートデスク」です。場所は新城市の湯谷温泉。温泉付きのシェアオフィスとして起業実践者に提供されるほか、地域住民との交流サロンとしても機能します。

●問合：〒460－0007 名古屋市中区新栄一丁目2番8号CBC会館6F
株式会社CBCクリエイション 営業戦略センター
TEL：052-251-1181（平日9：00～17：00）　FAX：052-252-0070
MAIL：三河の山里サポートデスクinfo@spdesk.mikawayamazato.jp
担当者：やま・ひと・しごと広域連携推進事業　出口・松本

その他の情報は、センターHPをチェック！

new センタースタッフに、仲間入りしました！

たなかあつこ
田中敦子さん

4月から、一般社団法人おいでん・さんそんのコーディネートスタッフとして加わりました田中敦子と申します。

これまで、豊田市内で活動していると、様々な取り組みで「おいでん・さんそんセンター」の名前を目にしてきました。どこに情報があるのかわからない時、何かをはじめようと考えているとき、共にありながら、他の取り組み団体や個人、場所とつながっていける「おいでん・さんそんセンター」という存在と協力は、とても大切なのだなあと感じておりました。

私は6年前に豊田市に戻ってきましたが、豊田市には多様な暮らしからみえてくる多彩な色があることに驚きました。まちでの暮らし、山での暮らし、様々な方の想いをつなぐプラットホームの一員として、共に活動していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

REPORT

第6回ほんわか里山交流まつりIN香恋の里開催

下山

美味しさ、楽しさ満載の1日

下山中学校吹奏楽部の演奏

３月２６日（日）、昨年に続き、神殿町のまどいの丘で開催されました。

下山といえば、おいしい食べ物。五平餅や手作りソーセージ、イノシシメニュー、つきたて餅などの出店がありました。こんにゃく作りやしいたけの菌打ち、五平マン（大きな五平餅）作り、薪割り、木工など体験ブースも盛りだくさんでした。雨にもかかわらずたくさんの方が来場し、賑わっていました。

下山の他、旭や稲武、足助、遠くは根羽村からの出展者もあり、まさに山里の魅力が大集合でした。

ステージでは、和太鼓、篠笛、日本舞踊、民踊、大正琴、合唱、下山中学校吹奏楽部が登場し、会場を盛り上げました。（鈴木明日香）

↑多彩な出展者、ステージの様子

REPORT

住みにおいでん！いなか暮らし説明会

下山

空き家見学と先輩移住者座談会

「ほんわか里山交流まつり」と同日開催で「住みにおいでん!いなか暮らし説明会」が行われました。

午前中は空き家・宅地候補地の現地見学会があり、１３組２６名の方が雨の中、まどいの丘から程近い和合地区の空き家３軒・宅地候補地１ケ所の見学に回りました。名古屋からの参加者が多く、東郷・日進、遠くは東京からの参加者もあり、皆さん真剣な表情で見学をしていました。

午後からは「Iターン者との座談会」が開かれました。下山に移住してそれぞれ２５年目、１１年目の先輩移住者を交えて、田舎暮しの良し悪し談義が行われ、７組１２名の参加がありました。（小黒敦子）

REPORT

セカンドスクール春フリー版開催

全域

子ども達が自然の中で農作業など体験

3月27日～31日にかけて、旭、足助、稲武、下山の各地区で「セカンドスクール春フリー版」が行われ、全部で5企画、約90名の小学生が参加しました。主催はとよた都市農山村交流ネットワークです。

旭のちんちゃん亭では、山菜採りや手打ちうどん作りの他、薪割り、しいたけの菌打ちなど農作業の手伝いもしました。自由な散策時間も多く、自然の中で思いっきり遊び、楽しめたようです。

稲武では、1日目はおひなさんが飾ってある町中での宝探し、ちらし寿司作りをしました。2日目はグループに別れ農家に滞在し、農作業を体験。雪がある地域もあり、子どもたちはそり遊びができ大喜び。稲武ならではの3日間を過ごしました。

旭の山っ子くらぶでは、野草を摘んで天ぷらにしたり、原生林ハイキング、もちつき、お楽しみ会では班ごとに出し物を発表しました。また、てくてく農園を講師に、鶏4羽をさばいてまるごといただく時間もありました。普段と違う環境で過ごした3日間は、きっと大切な思い出となることでしょう。（鈴木明日香）

稲武でのちらし寿司作りの様子

↑各地区での子ども達の様子

1．藍染め体験では、完成作品を見て子どもたちが誇らしげな様子　2．小雨の中の城ケ山トレッキング　3．大根まつりでは、子どもは大根を抜き、母は切干大根を作った　4．定例会では、企画のアイデアをそれぞれのメンバーが出し合い、付箋に書いて貼りだしていく

城ケ山トレッキングの様子

メンバーによる絵本の読み聞かせ

に加えて『お山のプレーパーク（仮称）』という遊び場作りに取り掛かっているそうです。

大人も子どもも、もっと自由に、楽にいられる場を作りたいという思いから始まった新しい活動。講師を招いた勉強会をしたり、試しに遊んでみたりして、着々と準備を進めています。

子どもたちの変化、親の育ち

メンバーの三浦明美さん、庄司美穂さんに、参加を重ねることで、子どもたちにどんな変化があったかを聞いてみると、「地球子屋の企画で川遊びをしたことがきっかけで、日常的に川遊びするようになり、すごく熱中するようになった」と美穂さん。「子ども同士が喧嘩をするとき、口出しせずに見守ることを大事にしているんですが、それでも当初は心のなかでモヤモヤしていました。回を重ねるにつれて、親と子はセットではなく、子どもは一人の人格だと尊重できるようになり、親として勉強になりました。子ども同士も何度も喧嘩しながらお互いへの信頼を高めているように見えます」と明美さん。

母たちがお互いを知ると もっと楽しい！

もともと子どもたちの育ちに良い影響があるようにと始まった地球子屋ですが、お母さんたちにとっても、よりワクワクする活動に変化してきているそうです。きっかけは、美術の先生をしているメンバーが藍染イベントのちらしを作成したこと。そのクオリティの高さに他のメンバーが感激し、色紙のイラストなど活動外の仕事を有償で依頼することにつながりました。

この経験から「母親同士が、自分たちのできることを表に出し合えるといいね」と、今年度はメンバーが先生になるヘアカット教室や、メンバーの自己紹介や、それぞれが暮らしの中でこだわっていることなどを紹介した冊子を作る計画を立てているそうです。

「地球子屋の活動は、私の暮らしに欠かせない。お母さんたちが実現したいことを後ろからそっと後押しすることに、やりがいを感じています」と美穂さん。「地球子屋が子ども達にとって安心できる場になってほしいと思っています。その経験が大人になった時、心の支えになるんじゃないかなぁ」と明美さん。

子どもだけではなく、大人も一緒になって大自然のなかでお互いを知り、学び、成長していく。「遊ぶ場があって、友がいて。母が楽しければ、子も楽しい」。美穂さんが言うこの言葉に稲武地球子屋が表現されている気がします。（木浦幸加）

月に一度の定例会では、それぞれのメンバーが持ち寄って食事会をしている

●活動に関する問合せ先

庄司美穂さん　tel 090-3454-1014

庄司美穂さん

三浦明美さん

藍染のイベントのちらし